
原著論文

情報社会において人間存在はデータ化し尽くせるのか ——アクターネットワーク理論を手がかりに

Human Being and Full Datafication in the Information Society: An Actor-Network Theory Perspective

キーワード：

全面的データ化, アクターネットワーク理論, プラズマ, 前アクター, 不確定性

keyword：

full datafication, Actor-Network Theory, Plasma, pre-actor, uncertainty

日本大学 山口 達 男
Nihon University Tatsuo YAMAGUCHI

要 約

本稿は、現代の情報社会において人間存在が〈サイボーグ／ハイブリッド〉として経験的に把握されつつある状況を出発点に、人間を全面的にデータ化し得る存在として措定する存在論的志向の是非について、アクターネットワーク理論（ANT）を手がかりに理論的に検討したものである。

まず、情報通信デバイスとの結合や監視資本主義の展開によって、人間のあらゆる領域がデータ化し得るかのように扱われている現状を確認し、この志向に対する存在論的な問いを提示した。次に、ANTの理論的特徴を整理し、アクターが人間と非人間のエージェンシーの交錯点に位置しつつ、〈アクター＝ネットワーク〉という関係のもとで実在することを明らかにした。さらに、ハーマンによる批判を契機としてラトゥールの議論を再検討し、アクターには「潜在的可能性としての余剰」と「関係から零れ落ちた余剰」という、ふたつの余剰が認められることを論じた。その上で、「プラズマ」概念への注目から、後者の余剰が実在の構築過程に内在する原理的な記述不可能性であることを示すとともに、「不確定性」という特性を備え、潜勢的な様態として存在する「前アクター」を見出した。

原稿受付：2024年3月18日

掲載決定：2026年1月31日

以上を踏まえ、ANTがデータ化そのものは肯定しつつも、人間存在を余すところなくデータ化し尽くせるとする立場を斥ける理論であると結論づけ、同時に監視資本主義におけるデータのプロファイリングを存在論的な議論へと接続し直す視座を提示した。

Abstract

This article theoretically examines, from the perspective of Actor-Network Theory (ANT), the validity of an ontological orientation that posits the human being as an entity fully amenable to datafication. It takes as its point of departure the contemporary information society, in which human being is increasingly experienced empirically as cyborg or hybrid.

First, the article points out the contemporary situation in which, through the coupling of information and communication devices and the expansion of Surveillance Capitalism, all domains of the human being are treated as if they were amenable to datafication. It then raises an ontological question concerning this orientation.

Next, the article outlines the theoretical features of Actor-Network Theory and clarifies that actors are situated at the intersection of human and non-human agencies, existing within relations articulated as “Actor=Network.”

Furthermore, prompted by critiques advanced by Graham Harman, the article reconsiders Bruno Latour’s arguments and argues that actors necessarily involve two forms of reserve: a reserve of “virtuality” and a reserve that “falls out of relation.”

Building on this discussion, by focusing on the concept of Plasma, the article demonstrates that the latter reserve constitutes a principled impossibility of description inherent in the process of constructing reality. In doing so, it discerns a “pre-actor” as a virtual mode grounded in uncertainty.

Finally, the article concludes that while Actor-Network Theory affirms datafication as such, it rejects the position that the human being can be exhaustively captured through full datafication. On this basis, it offers a perspective that reconnects data-based profiling in Surveillance Capitalism to ontological inquiry.

1 はじめに

今日のわれわれは「人間」(human)としてよりも〈サイボーグ〉(cyborg)として、あるいは「非人間」(non-human)との〈混雑種〉(hybrid)として日常に存在している。このことは、われわれが情報通信デバイスを「携帯する」段階から身体に「装着する」段階へ移行し、さらに体内に「埋め込む」局面に至ろうとしている現況を想起すれば首肯できよう。

もっとも、こうした捉え方はICTやIoT/IOEに基づくデジタル端末の発展・普及によって初めて可能となったわけではない。実際「人間存在」

(human being)が生物や機械といった「人間ならざるもの」との混合態として本来的に存在しているという主張は、ダナ・ハラウェイによってすでになされている(Haraway 1985=2001, 1991=2000)。同様の観方は、各存在体の実在を諸々の事物との「関係」から認定する「関係主義」(relationalism)や、「存在論的転回」

(Ontological Turn)を経た人類学においても見て取れる。しかし各種デバイスとの物理的・身体的な結合は、われわれの「在り方」が〈サイボーグ〉や〈ハイブリッド〉という位相にあるとする存在論的理解を、理論的な次元のみならず経験的な事実としても意識させると同時に、人間存在に対する或る存在論的志向をも情報社会にもたらしたとように思われる。

というのも、スマートフォンと日常的に連携することで、われわれの行動や嗜好は位置情報や移動履歴、検索・閲覧・再生・購入の記録、SNSの利用傾向やネットサービスのアカウント情報といった「データ／数値」として自動的かつ継続的に抽出・蓄積されるようになったからだ。しかも、データ化の範囲はデバイスとの結びつきが密接になるにつれて拡大しており、ウェアラブル端末やインプラントブル端末では体温、心拍数、血中酸素濃度といった生体活動に加え、脳や心理の状態

までもがその対象とされている。すなわち、デジタル端末との混交によって「人間のあらゆる領域はデータに還元し得る」とする意識、言い換えれば人間存在を全面的にデータ化／数値化し得るものとして措定していく存在論的志向が、社会の諸実践において強まっているのである。所謂「監視資本主義」(Surveillance Capitalism)は、まさにそのような志向に基づく実践のひとつであろう。

ショシャナ・ズボフが指摘するとおり、監視資本主義では「ユーザーへのサービスに必要とされる以上の行動データ」をどれほど多く抽出しているかが、巨大IT企業やデジタル・プラットフォームが利益の最大化を図る上での決定的な要因とされている(Zuboff 2019=2021: 89)。検索エンジンを例にするならば、入力された検索語はサービスを機能させるという目的にとって「必要とされるデータ」であるが⁽¹⁾、検索行為の状況や文脈に関する事項——検索を行なった時刻や場所、検索前に閲覧していたウェブサイトなど——はサービス成立に対して付随的な性格しか持たないため「必要とされる以上のデータ」に該当する。しかし、そうした副次的に生成される目的外のデータであっても、そこから利用者の行動傾向などを推測し、新たな収益機会が見出せるのであれば、それらは経済的価値を帯びたものへと転化する。

ただし、いかなるデータが将来的な利益拡大に資するかをあらかじめ判定することは容易ではない。したがって、機会損失を回避するためには、人間にまつわるすべての側面に「価値があるかもしれない」と仮定した上でデータを抽出していかざるを得ない⁽²⁾。その結果、人間存在は原理的にあらゆる領域をデータの的に把握可能なものとして扱われることとなる。監視資本主義者たちがオンライン上の行動から日常生活での振る舞い、そして「個人の人の人柄、雰囲気、感情、嘘、脆弱さ」といった「あらゆるレベルの内面的要素」へとデータ化の範囲を拡張しているのは(Zuboff 2019=2021: 226-8)、彼らがそのことに自覚的か否か

にかかわらず、われわれを全面的にデータ化できる存在と看做す存在論的志向を前提しているからにはほかならない。

もちろん、デバイスとの結合や監視資本主義の実践を以って、実際にわれわれが余すところなくデータ／数値のかたちで記述・測定されていると言うつもりはない。むしろここでの関心は、〈サイボーグ／ハイブリッド〉としての在り方を本来的に備える人間は、果たしてデータの的に計測し尽くせる存在として措定し得るのかという存在論的な問いにある。本稿は、ミシェル・カロンやブルーノ・ラトゥールらが考案・提唱した「アクターネットワーク理論」(Actor-Network Theory, ANT)を手がかりとすることで、これに応えていくものである。

周知のとおり、ANTは1970年代フランスにおける電気自動車の導入過程や、19世紀後半になされたルイ・パストゥールによる乳酸発酵素の発見プロセスなどに対する実証的な研究を通して、人間とそれ以外の存在(非人間)との間に互恵的関係を見出し、「社会」を説明項に、「科学」を被説明項に据えていた当時の科学論^{サイエンス・スタディーズ}、とりわけ「科学知識の社会学」(Sociology of Scientific Knowledge, SSK)に見直しを迫った議論である。ここにはハラウェイなどとも通底する「人間観」のみならず、事物の把握し切れなさを認める姿勢が窺えるため、ANTは〈サイボーグ／ハイブリッド〉という在り方を踏まえつつ、「人間存在」を全面的にデータ化可能と措定する志向を問い直す上での橋頭堡になり得るとわれわれは考える。したがってまずは、ANTを特徴づける主要な論点を確認し、そこに看取される人間観を整理するところから始めよう⁽³⁾。

2 アクターネットワーク理論の人間観

ANTの理論的特徴は次の三点に大別される。いずれもすでによく知られた事項だが、あらためて押さえておきたい。第一に、人間と非人間をと

に「行為／作用するもの」(actor)と看做し、それらを存在論的に区別しないことで「自然／社会」というデカルト由来の近代的二分法を排却する点。次に、アクターとしての人間と非人間が「連関」(association)することで形成された「ネットワーク」(network)、すなわち「アクターネットワーク」(Actor-Network)が「純化」(purification)されることで、自然と社会は事後的に「構築」(construction)されると捉える点。これにより両者は諸アクターの「集合体」^{コレクティブ}(collective)として、人間／非人間と同様、存在論的に同格とされる。三つ目は、個々の存在体は他のアクターたちからの「エージェンシー」(agency)によって、自らもアクターとしての身分を得るとする点である。

ちなみにラトゥールは「ディーゼル・エンジン」がルドルフ・ディーゼルによって構想されてから、実際に動力源として普及するようになるまでの過程を辿ることで、技術的な「人工物」(artifact)も諸アクターの連関／ネットワークが純化されたものであり、それゆえ「自然」との間に明確な存在論的区別はないと指摘する(Latour 1987=1999)。したがって、自然と同じく諸アクターの集合体とされた「社会」に対してもそうした差はないことになるが、それはつまり、自然と社会、そして人工物すべてを包含する〈世界〉それ自体の基底に「アクターのネットワーク」が据えられることを意味する⁽⁴⁾。いわば〈ネットワーク=世界〉という存在論的関係をANTには見出すことができる。そのため、自然／社会というア・プリオリに独立した領域によって世界は成立していると看做してきた「近代」の認識は何ら自明ではなく、それらは人間と非人間が混在するネットワークが純化されることで、ア・ポステリオリに形象化されたものに過ぎない。「われわれは一度も近代であったことはない」(We have never been Modern.)というラトゥールの言明は、この関係主義的な〈世界〉像——「非近代」^{ノンモダン}(non-modern)と称されている——を表したものである。

では、〈世界〉の基底がアクターネットワークとして把握される際、“世界内存在”である個々のアクターをANTはどのように規定しているのだろうか。言い換えれば、人間と非人間の「在り方」をどう捉えているのか。このことを探るにあたって鍵となるのが「エージェンシー」の概念である。しかしその前に、エージェンシーと密接に関連する「翻訳」(translation)について触れておきたい。

先述したとおり、アクターネットワークは諸アクターの連関のことだが、それはアクターたちの「翻訳」でなされるという。このとき翻訳とは、諸アクターによって「事実」が構築されていくまでに実践された「行為」(act)の転換(translate)、すなわち各存在体が自身の行為を別の目標へと向け変え、新たな行為を創発する事態を指すのだが、こうした行為の翻訳＝転換を生じさせる契機となるのが「エージェンシー」と呼ばれるものだ。

一般的にエージェンシーは「何らか(たとえば構造)の影響を受けるなかで主体が行為を生み出す力」とされるが、ラトゥールの場合は何者／何物かをアクターへと形成させていく「作用」(act)を意味する(Latour 2005=2019: 499, 訳注9)。したがって、ANTにおいてエージェンシーとは行為の主体がまず存在し、それが一定の制約の中でどのように行為するかという能力のことではなく、諸存在体を何かしらの行為へと向かわせる(翻訳＝転換させる)働きかけのことである。ということつまり、人間か非人間かを問わず諸存在体は自立的＝自律的な主体として単独で行為しているわけではない。他のアクターからエージェンシー／働きかけが向けられることで、各存在体は行為を発動させ、「アクター」へとその身分を転じていく⁽⁵⁾。アクターは「行為の源ではなく、無数の事実が群がってくる動的な標的」(Latour 2005=2019: 88)として、各方位から向けられる人間／非人間のエージェンシーが交錯し、混交する地点に位置する存在なのである。その意味で

ANTにおけるアクターの「在り方」はハラウェイの人間観——〈サイボーグ／ハイブリッド〉として本来的にあるとする観方——と共通していると理解できよう。そして、この働きかけによって様々に行為が翻訳＝転換されて次の行為が創発し、その行為が別の存在体に対するエージェンシーとして機能し、そこからさらなる行為の翻訳＝転換が生じ……という状況が出来る。それゆえ、アクターネットワークはエージェンシーの総体と解して大過ない。エージェンシーの連鎖的接続こそが、諸存在体を連関させると同時に、それらをアクターとして定位させるのだ。

3 ネットワークとしてのアクター

ところで、ラトゥールはアクターの連関に「ネットワーク」ではなく「ワークネット」や「アクション・ネット」という表記を適用すべきだったと述べており、そこに「働き」(work)や「作用」(action)が網(net)状に結びついていることを強調しようとする意図があったことを窺わせている(Latour 2005=2019: 249-50)。そのため、アクターネットワークが純化されることで構築された「諸アクターの集合体」である「自然」と「社会」は静的な構造ではなく、行為／作用の翻訳＝転換が時々刻々と生じ、次々とエージェンシーの向かう先が変転していくことで、アクターの連関の仕方がいつでも「組み直し」(reassemble)可能な、あるいはつねに組み直されている動的な様相をその基底に秘めたものとして看做されている。

このとき、ラトゥールがアクターとネットワークをハイフンで結びつけ、Actor-Networkと表記していることを見逃してはならない⁽⁶⁾。「あるネットワークを理解するためには、それを構成している行為者たちを探さなければならないが、ある行為者を理解するためには、それが構成しているネットワークを探さなければならない」(Latour 2002=2011: 242)とされているように、アクター

という「部分」によって「全体としてのネットワーク」が形成されているのでもなければ、ネットワークという「全体」を分割することで「部分としてのアクター」が現出するのでもなく、アクターネットワークという動的な関係態がまずあり、そこから諸々の存在体の実在が構築されていくという機序を、このハイフンは表している。「一つのアクター・ネットワークが『ブラックボックス』となり、また別の規模の大きいアクター・ネットワークに取りこまれ安定化することで、これがまた『ブラックボックス』となる」(足立 2001: 10) という指摘も同様に、アクターネットワークが純化されることで構築された存在体が、アクターとして他の存在体にエージェンシーを向け、その存在体をアクターへと変容させつつ、それとの間に連関／ネットワークを形成し、この連関が新たな存在体として純化され得ることを示しており、事物に先行してエージェンシーの総体＝アクターネットワークがあることをやはり意味している。事実、自動車という事物はエンジンとタイヤとの連関によって、交通システムという制度は自動車と信号との結びつきによって、スマートシティという仕組みは交通システムとAIとの関係によって……といったように、既存するアクターたちの行為／作用の連鎖的接続によって新たな存在体／アクターが入れ子的に構築されている事態は日常的に見受けられる。

これらを鑑みると、Actor-Networkにハイフンが用いられているのは、そこに「アクターのネットワーク」を意味させると同時に「ネットワークとしてのアクター」をも含意させるためだったと推察できる。アクターはつねにすでにネットワークと等置可能なものであり、それゆえ両者の存在論的關係を〈アクター＝ネットワーク〉と表記することも可能であろう。ラトゥール自身がそのように明示しているわけではないが、ネットワークとしての連関がすべてに先立ち、そこから個々のアクターの実在が純化によって立ち上がってくるという機序をANTが見出すならば、アクターとネッ

トワークを存在論的に同位同格であると捉え、両者を等号で結びつけることはまったくの的外れではないはずだ⁽⁷⁾。人間と非人間によるエージェンシーの交錯点に位置するという事実だけでなく、両者の連関／ネットワークをその基底として備えている点でも、アクターは〈サイボーグ／ハイブリッド〉という様態をした存在なのである。また、われわれはすでに〈世界〉とネットワークとの存在論的關係を〈ネットワーク＝世界〉と表したが、これを先の等式に代入すれば、アクターネットワークは〈アクター＝ネットワーク＝世界〉としても表記可能となる。そこからは、個々のアクターと〈世界〉の間にさえ存在論的な差異がないこと、〈アクター＝世界〉という関係も看取できよう⁽⁸⁾。

一方、このように関係主義的な人間観および存在体の観方採るANTに対しては批判もある。なかでも、「思弁的实在論」(Speculative Realism)の一端を担い、自身としては「オブジェクト指向存在論」(Object-Oriented Ontology, OOO)を唱えるグレアム・ハーマンは、ANTが「アクターとは関係である」(an actor is its relations)というテーゼを堅守するあまり、ネットワークに還元し切れない「余剰」(reserve)を存在体が抱えていることを等閑視していると指摘する。この主張は、アクター(としての人間)にはデータとして記述・測定し尽くせない次元があることを示唆するものであり、われわれにとって検討すべき論点を孕んでいる。むしろ彼を経由することで、人間のあらゆる領域がデータに還元される事態を存在論の射程から考察することができる。そこで次に、ハーマンが初めてラトゥールを主題的に取り上げた著作*Prince of Network: Bruno Latour and Metaphysics*に依拠し、その批判の理路を辿ることとしよう。

4 ハーマンによるラトゥール批判

ハーマンはまず、ANTが事物^{オブジェクト}(object)の

ポテンシャルティ

「潜在性」(potentiality)を否定していると指摘するところから批判を始める。或る事物の「潜在的な何か」を云々することは、その「何か」がすでに存在してはいるものの、未だ現前していないことを前提にするが、ラトゥールにおいてアクターはいまここに現れている状態で実在しているとされるため、それ以外の潜在的な相貌がそこに隠れているわけではないと解釈し得るからだ。たとえば「座っている人間」は、椅子やクッションなどとの間でいままさに形成されている関係からそのように実在する存在体としてANTでは把握される。だが、それでは「座っている人間」を「立ち上がることもできる人間」として解することができないとハーマンは難ずる。これに対してラトゥールからは、関係が組み直されることでアクターの在り方も再構築されるとの応答が予想されよう。しかし、事物の実在が変移した後は、それ以前の関係は(痕跡として残ることはあっても)もはや存在しないのであり、それゆえハーマンは、変化前と変化後の同一性をどのように認めることができるのかとさらなる疑問を呈している⁽⁹⁾。

また、現在するアクターが連関／ネットワークによってその実在を構築された「関係的なもの」(the relational)であるのならば、アクターに備わる何がしかの「性質」(qualities)も連関の「効果」(effect)として捉え得るとハーマンは述べる。つまり、アクターに本源的な「一次性質」(primary qualities)を認めず、「二次性質」(secondary qualities)のみがそれには備わるとするのがラトゥールの立場というわけだ。ところが、ア・プリオリに何がしかの性質を持っていなければ、アクターたちは「特徴のない塊」(featureless lump)として互いに区別できなくなり、そもそも関係を結ぶことが不可能なのではないか。関係に還元できない一次性質や個性、差異といったものがそれぞれの存在体に備わっているからこそ、アクターは相互に関わり合い、連関／ネットワークを形成し得るとともに、事物の同一性も説明できるとハーマンは主張する。

要するにここでの批判は、ラトゥールが「現実的なもの」(the actual)として実在する個々の存在体を「関係的なもの」と同一視し過ぎることで、事物は本来「実在の対象」(Real Object)として非関係的に存在することを見落としている点に向けられている。そして、あらゆる事物が関係に還元し得ない「それ以上の何か」(something more)を抱えているという指摘は、「人間の全面的データ化」をめぐる存在論的な問いにも接続し得よう。ANTにおいてアクターの実在は現在の関係によって定義されるため、その関係を形成している要素を余すところなく記述・測定し尽くすことができれば、それは理論構造上、存在体のあらゆる領域をデータ化したと看做せる一方、ハーマンの批判を受け容れた場合、事物には非関係的な「余剰」(reserve)が伏在していることとなり、そのすべてをデータとして把握するのは不可能と言い得るからだ。

ただし、こうしたANT理解はハーマンの解釈に依拠した場合のものである。ラトゥールの議論を真摯に検討すれば、実は彼自身も「余剰」をアクターに看取していることに気づかされる。したがって、ハーマンによる指摘を無批判に受け止めるのではなく、むしろそれを契機とすることで、全面的データ化の限界をも視野に収めた理論としてANTを再定位させることが可能なのだが、その際ラトゥールに見出せる「余剰」がふたつの意味を有している点には留意しなければならない。

5 ふたつの「余剰」

すでにみたように、アクターたちの連関に組み直しが生じれば、その実在もまた再構築され、現在認識されている在り方とは別様にあり得るのがANTにおける関係主義的な観方である。すなわち、社会にせよ自然にせよ、ひいては人間存在にせよ、動的な関係態であるアクターネットワークを基底とする各存在体の実在は暫定的なものにすぎず、

つねにオルタナティブへの「潜在的^{ヴァーチャリティ}可能性」(virtuality)を備えている。換言すれば、われわれが認識している事物の实在は、たしかに現時点での連関に基づいたものだが、唯一で絶対的な在り方ではない。そこには「別様にもあり得る」という余白、つまり「余剰」が保持されているのである。もちろん、「現時点での連関」が長期間変わることなく存続することもあり得るため、まるでその在り方が不変的に捉えられる場合も考えられる。それでもアクターの連関が「組み直し可能」である限り、事物は原則的に一時的で可変的な在り方をしている——「潜在的可能性としての余剰」に拓かれている——と看做されなければならない。

とはいえ、いま指摘したことは結局「関係が変わることでアクターも変容する」というハーマンが非難した論理と同じであり、事物の实在が変化した際の同一性をやはり説明できないのではないかと、との借問があるかもしれない。ふたつ目の「余剰」はこの点に関わってくる。では、それはいかなる余剰か。

ラトゥールは自身が同行したアマゾンの森林土壌調査に対する分析を通して、「諸アクターの関係」(質料)から「新たなアクター」(形相)への変換(構築)が行なわれる過程では「断絶」が生じると述べている(Latour 1999=2007)。人間と非人間の連関／ネットワークによる構成物が「強さの試験」(trials of strength)を通過できるように純化されるまでの間には、捨象されてしまった関係が数多あるわけだ。事物の实在^{リアリティ}(reality)は、無数にある潜在的^{ヴァーチャル}(virtual)な関係の層——基底としてのアクターネットワーク——を「地」とし、そこから「図」として現実^{リアル}(real)の層へと顕在化^{アクチュアライズ}(actualize)した——当該事物にまつわる連関／ネットワークとして観察・記述された——特定の^{特定の}関係の、さらに一部が純化されることによって構築されるのである。その際、純化された関係は、それ以外の残存した関係を「地」とする新たな「図」として位置づけられる。このように「地」から「図」

への変換が重ねられていく過程において、先行する関係のすべてが次の段階に引き継がれるわけではなく、一部の関係のみが継承され、他の関係は捨象される点にラトゥールの謂う「断絶」が生じる。

このことから、各存在体の实在の背後には純化されずに残った関係、いわば「関係から零れ落ちた余剰」が構造的に潜んでいる事実が窺える。したがって、ハーマンが理解したように「現実的なもの」はいままさに形成されている関係の中でのみ存在するわけではない。「地」と「図」が不可分であることから察せられるとおり、純化されなかった関係もまた、「現実的なもの」からは切り離し得ない次元のものだからだ。

そして、そうした「余剰」が「地」として留まり続けるからこそ、現に顕在化している関係に組み直しの余地がもたらされ、各存在体を「潜在的^{潜在的}可能性としての余剰」に拓くと同時に、实在の仕方が再構築されても——椅子に座っている人物が立ち上がっても——なお、同一の存在として認め得る条件が確保される。つまり、实在を構築している関係が変化したとしても、それは一段階前の関係から別の純化が実行されたという事態を意味しており、変化前後の实在(「図」)それぞれが同じ背景(「地」)を部分的に共有しているため、両者の同一性は保持されるのである。

ならば、この「関係から零れ落ちた余剰」を実践的あるいは技術的な「記述の不足」と認識してはならない。たしかに当該存在体にまつわる関係を観察し尽くすことは実務上困難であり、事物の实在を構築するにあたっては、広範かつ複雑な関係網を記述可能な範囲に縮減せざるを得ず、そこに回収し切れない関係が残余するという事情は否定できない。だが、ここでの「余剰」とはそうした一般的にも想定される実務的制約に由来するものではない。少なくともそのことは「余剰」にとって二義的な要因でしかない。すでに確認したとおり、それは「地」から「図」への変換として、事物の实在が構築される過程それ自体が必然的に孕

むところのものである。もしこの点を見誤り、「関係から零れ落ちた余剰」を実践上の限界にのみ帰すならば、観察や記述、データ化の技術が向上さえすれば残存した関係も将来的に余すところなく把握できるという発想につながり、事物の同一性を担保する根拠を實在が構築される過程の内部から失わせてしまう。その場合、ハーマンによるANT理解に立ち戻り、彼の謂う「実在的对象」や「一次性質」といった、それぞれの存在体にあらかじめ備わる非関係的・本源的な属性を同一性の条件とせざるを得なくなる。

もちろん、ここでの「余剰」が単なる記述不足によるものではないとしても、その事実だけを以って全面的データ化の限界を示す理論としてANTをただちに解釈できるわけではない。とはいえ、ハーマンの懸念した同一性の問題がラトゥールの議論に沿うかたちで解決され得る以上、関係から完全に独立した本質を指定する彼の立場（オブジェクト指向存在論）に依拠してその限界を指摘していくこともできない。したがって、「関係から零れ落ちた余剰」を存在体の原理的な記述不可能性として認めていく方途をANTの内部から導出していく必要があるのだが、その際に導きの糸となるのがラトゥールによって提示されながらも主題的には取り上げられることのなかった「プラズマ」(Plasma) という概念である⁽¹⁰⁾。この概念への検討を通すことで、〈サイボーグ／ハイブリッド〉という人間存在の本来的在り方がデータとして記述・測定し尽くせるのかという本稿の関心にも応えられよう。

6 プラズマから前アクターへ

プラズマとは「まだ定型化されておらず、まだ計測されておらず、まだ社会化されておらず、まだ計測基準の連鎖に組み込まれておらず、まだカバー、調査、動員されておらず、あるいは、主体化されていないもの」(Latour 2005=2019: 462) を指す。

いわばネットワークと未接続の外部領域のことであり、ラトゥールはそれを諸アクターの連関にとつての「環境」(milieu) として規定している。ただし、「単に知られていないだけ」の「不可知的要素」や、網の目の合間／隙間と評されていることからわかるように (Latour 2005=2019: 463, 久保 2019: 252), この外部＝環境は関係から絶対的に独立した領域というわけではない。ネットワークを前提とし、その形成と記述に伴って不可分に生じる「空白」のことであり、あくまで関係を観察・記述する者にとつての“外部”に過ぎない。つまりプラズマは、前節で導出した「関係から零れ落ちた余剰」と重なり合う位相——實在が構築される過程に内在しつつ、その都度の純化で回収されずに残存した関係(＝「地」)の水準——にあり、本質的に解消し得ないものである。

このようにプラズマを把握したとき、そこには未だ可知的ではない「何か」が存在していると想定される⁽¹¹⁾。観測や純化はされていないものの、プラズマもまた「関係」であるならば、その担い手がいると考えざるを得ないからだ。したがって、その「何か」がすでにネットワークに組み込まれているアクターに対してエージェンシーを今後向けてくる、あるいは現在するアクターが将来的に「何か」へとエージェンシーを向けることによって、既存のネットワークに包摂され、観察者・記述者の前に可知的な様態で現出してくることは論理的にあり得る。

とはいえ、それに何がしかの實在が付与されているわけではない。もしプラズマに定位する存在体に事物としての實在を認めるならば、本稿が〈アクター＝ネットワーク〉と表記した関係性に基つき、その時点で他の存在体と連関している——すでに観測・純化されたネットワークに接続されている——と理解されなければならないためである。他方、プラズマが関係である以上、そこに想定される「何か」は「アクター同士のつながりから独立した状態」(Harman 2009: 124) に

ある非関係的なオブジェクト、すなわちハーマンが関係に先立つ実体として指摘する「実在の対象」とも異なる。ゆえに、ここでの「何か」とは、アクターとしての身分（事物としての実在）を得ていない存在体に位置づけられる。

実際ラトゥールは「アクターとしての身分を得ていない存在体」があることを否定しない。「アクターとは個性を（通常は擬人化によって）授けられたアクタンのことである」（Akrich & Latour 1992: 259）という説明や、「差異を作り出すことで事態を変える物事はすべてアクターである——あるいは、まだ形象化されていなければ、アクタンである」（Latour 2005=2019: 134, 傍点邦訳書）といった言表における「アクタン」（actant）が、まさにアクター以前の段階にある存在体に相当する。

ハーマンも指摘したように、ANTにおいてアクターの「個性」（character）とは、各存在体から向けられたエージェンシーを「プラグイン」（plugin）することで得られる（Latour 2005=2019: 396-7）。それゆえ個性を獲得していないアクタンは、未だエージェンシーを向けられておらず、観察者によっていずれの連関／ネットワークにも組み込まれていない——アクターとして成立していない——と捉えられる。「まだ形象化されていない」という言明も同様に、連関の純化による実在の構築は未だなされていないが、それでもなお「何か」としては存在していることを意味する。でなければ、その「何か」に対して、たとえば「乳酸発酵素」などの名ですでに形象化が済まされ、アクターとしての実在が認定されているはずだ⁽¹²⁾。

これらのことから、プラズマに見出し得る「アクターとしての身分を得ていない存在体」を「前アクター」（pre-actor）と呼称しておきたい⁽¹³⁾。その上で問題となるのは、関係に先立つ実体でもなく、未だ実在も認められていない前アクターを、いかなる様態のものとして把握すべきかという点である。

7 前アクターと無限後退

ここでアクターネットワークが入れ子構造を産み出すものであったことを思い出そう。あらゆる事物／アクターの実在は、潜在的なアクターネットワークから特定の関係が顕在化し、さらにその一部が純化されることで構築されるが、その事物／アクターが、同様に構築された他の事物／アクターたちと連関し、ネットワークを形成することで新たなアクターネットワークを築き、そこからさらなる事物／アクターが構築され、それがまた……といったかたちで「潜在／顕在」（「地／図」）が交互に入れ換わる階層的な運動がそこでは展開される。逆に、この階層的運動を下降するならば、「顕在態としてのアクター」から、それを構築する「潜在態としてのアクターネットワーク」へ、そのアクターネットワークを形成する「潜在態としての諸アクター」へ、それら諸アクターを構築する「潜在態としての諸アクターネットワーク」へと終わりのなき分岐が続いていくこととなる。

ハーマンはこの事態を「アクターの無限後退」（infinite regress of actors）と評し、運動の始点となる「最終段階」（final stage）に至ることができないと批判するのだが、前アクターはこの課題に深く関与する。アクターの身分を得ていない「何か」をめぐる、行為／作用の翻訳＝転換が作動し始めるまさにそのとき、連関／ネットワークが発生すると同時に、「何か」もまたアクターとして顕現することになるからだ。それゆえ、前アクターは「アクターとして顕現し得る潜在的な様態」をしていると把握できる⁽¹⁴⁾。

しかし、それでも結局、ハーマンが論難したとおり、アクターとしての身分を得ていない前アクターは個性を未だ獲得していないため、相互に差異を欠く「特徴のない塊」に過ぎず、ネットワークを形成し得ない——「潜在／顕在」の運動を産出できない——のではないかと反論があり得る。だが、彼のように「差異がない」と「何

も備えていない」ことを同じ事態と認識してよいのだろうか。「同一の特性しか備えていない」こともまた「差異がない」と言えるのであれば、唯一備わっているその特性こそが「潜勢的な様態」の基盤を用意するとともに、アクターネットワークの運動を展開させる動因にもなると考えられる。

たとえば、アクターAとアクターBが結びつく際、AはアクターA'からのエージェンシーを、A'はアクターA''からのエージェンシーを契機として行為しており、BはB'を、B'はB''を契機として行為することで、AとBが連関したと想像してみよう。このときA''とB''がCという共通のアクターからのエージェンシーを起点として行為していた場合、CはAとBとの連関を支持するものとして挙げることができる。しかし、CもまたDとEからのエージェンシーの交錯点として行為しており、さらにそこにはD・D'・D''という系列と、E・E'・E''という系列があり、両系列はFを起点にしていると考えていくこともできる。

このようにアクターが連関／ネットワークを形成していく要因は様々なエージェンシーの系列に分歧し続けるのであり、最終的に無窮の彼方に想定されるXに至らざるを得ない。まさしくハーマンが謂う無限後退に陥るわけだが、このXの位置に前アクターの特性は対応する。何がしかのアクターとして名指しでき、エージェンシーの起点として指定できるならば、そこからさらにエージェンシーの系列を遡及することが可能となるからである⁽¹⁵⁾。したがって、前アクターに対して唯一確定的に見出すことができる特性は、特定の端緒として名指し得ないという「不確定性」(uncertainty)にほかならない⁽¹⁶⁾。

であるならば、前アクターはハーマンの謂う「最終段階」に関与するものの、それそのものというわけではない。何がしかの端緒として特定し得ないのであれば、それは無限後退の停止点としても確定できないということであり、最終段階であるかどうか「不確定」と捉えざるを得ないためだ。

逆にそうであるからこそ、前アクターはその唯一の特性を以てあらゆる系列や事物と接続可能なのであり、アクターネットワークの「潜在／顕在」という運動を展開させ、自らもアクターとして顕現し得る潜勢的な様態を取ることとなる。

以上の議論を翻っていけば、「関係から零れ落ちた余剰」が原理的に記述不可能なものであることも自ずと導かれよう。不確定性が「アクターネットワーク」の階層的運動にとって構造的・論理的に要請されるかぎり、それを特性に備える「前アクター」が定位するプラズマ——すなわち「関係から零れ落ちた余剰」——もまた、不確定性を根底的に帯びざるを得ず、その全貌を確定的に観測できないからである。

8 おわりに

われわれは、現行の情報社会においてますます経験的に看取されるようになった〈サイボーグ／ハイブリッド〉という「在り方」を出発点に、ANTの関係主義を参照枠としながら、人間存在を全面的にデータ化／数値化し得るものとして指定する存在論的志向の是非についてここまで検討してきた。では、そこからどんな結論を導き得るのか。あらためて本稿の議論を振り返ってみたい。

まずわれわれが行なったのは、ANTの理論的特徴から、「アクター」としての人間がそこではどのような在り方をする存在体として規定されるのかを確認することであった。そして、アクターが人間と非人間によるエージェンシーの交錯点に位置すると同時に、異種混濁的なネットワークを実在の基底としている——〈アクター＝ネットワーク〉という存在論的關係にある——ことを指摘した。

次に、ハーマンによる批判を踏まえ、存在体のあらゆる領域がデータ化され得ることをANTが内在的に容認しているかを判断するため、再度ラトゥールの議論を追った。その際、彼がふたつの

「余剰」、すなわち「潜在的可能性としての余剰」と「関係から零れ落ちた余剰」をアクターに看取していることを明らかにした。とくに後者は、アクターを「潜在的可能性としての余剰」へと拓くとともに、人間存在を全面的にデータ化できるとする志向に対して、理論的な留保を与える視点へとわれわれを導くものであった。

その上で、ラトウールが主題的には取り上げなかった「プラズマ」に着目し、それが「関係から零れ落ちた余剰」と重なり合う位相にあり、ネットワークの形成と記述に伴って不可分に生じる“空白”であるがゆえに、本質的に解消し得ないものだ¹と指摘した。加えて、プラズマには非関係的でも、実在が構築されているわけでもない「前アクター」と呼び得る存在体を見出し得ること、またそれが「アクターとして顕現し得る潜勢的な様態」にあり、その唯一の特性が「不確定性」であることを示した。そしてこれらの議論を踏まえ、「関係から零れ落ちた余剰」が原理的に観測し尽くせないもの、それゆえ存在体の実在が構築される過程に内在する「記述不可能性」に相当すると論定したのであった。

したがって、実在の背後に「関係から零れ落ちた余剰」を認めるANTは、この余剰が不確定性を根底的に帯びることから、人間存在を含め、あらゆる事物を全面的にデータ化し尽くせるとする存在論的志向を斥ける立場だと結論づけられる。ただし、このことは「データ化」そのものを不可能な営為として拒絶することを意味しない。〈アクター＝ネットワーク〉という存在論的な関係性からもわかるように、そしてあえてハーマンの術語に即して言うならば、ANTは「現実的なもの」

（事物／アクターとしての実在）と「関係的なもの」（ネットワーク）をあくまで同一視するからである。それゆえ、事物を観測可能な要素や関係に変換するデータ化の営みは、実在がいかに構築されているかを明らかにする実践として、むしろ積極的に肯定されているとすら言えよう。

いずれにせよ、情報通信デバイスと結合した〈サイボーグ／ハイブリッド〉であるわれわれを、データ化／数値化し得る存在として扱うこと自体は否定されるわけではない。しかし、存在体を余すところなくデータ／数値に還元し尽くせると把握する場合、それは論理的な謬りを免れ得ない。

こうした視点に立ったとき、監視資本主義をめぐる議論にもさらなる射程が与えられる。「そもそも人間はデータとして記述・観測し尽くせる存在なのか」という存在論的前提そのものを問うことによって、全面的データ化という発想が仮構だと示されたからだけではない。たとえば冒頭で挙げたズボフは、監視資本主義者たちが実行するデータ化によって人間存在の価値が一方的に収奪可能な“原材料”の地位に貶められ、無際限に搾取されていく事態に対し、自由や尊厳、プライバシーといった倫理的・権利的な観点からの批判を主に展開したが、本稿はそこに新たな解釈を可能とする。監視社会でなされている“レコメンド”や“パーソナライズ”、“セルフ・マネジメント”といったデータのプロファイリングに基づく実践が、われわれを一定の“人物像”に固定しようとしている点に関して、それが各存在体の「つねに別様にもあり得る潜在的可能性」²を制約する営為でもあると理解し得る視座をもたらし得る。したがって本稿は、デジタル・プラットフォームが推し進める「監視に基づく経済秩序」を、存在論的な議論へと接続し直す試みとして提示できるのであろう。

謝辞

本稿は、2023年9月16・17日に開催された社会情報学会大会（於：立教大学）での発表内容を加筆修正したものである。議論に参加してくださった方々に感謝申し上げます。また本稿の成果の一部は、社会情報学会2023年度若手研究助成を受けたことで得られたものである。併せて御礼申し上げます。

注

- (1) たとえば「内閣総理大臣」と「首相」は異なる表現だが、日本においては同一の対象を指示する語である。したがって、それぞれの語で検索した際の結果に大差があつては、検索エンジンはサービスとして成り立たない。それゆえ、入力された検索語を収集・分析し、語句同士の対応関係を正確に把握することは十分なサービスを提供するために不可欠となる。
- (2) こうした事情は、ビッグデータ分析において、データの「ゴミ」から事後的に価値や意味が^{マイニング}発掘される過程とパラレルである。
- (3) 本稿が扱うANTは、最も存在論的な含意に富む「ラトゥールのANT」であることをあらかじめ断っておく。
- (4) こうした「連関」ないし「つながり」を〈世界〉の基底に据える理解は、ラトゥール本人が影響を受けたと公言しているG. タルドのほか、G. ジンメルなど社会学成立期の議論にすでに見受けられる。ANTとこれらの関係主義的社会学理論との比較は別稿に期したい。
- (5) このことをラトゥールは、共演者や観客、照明や音響、脚本、衣装、セットなど多種多様な「者／物」からの作用によって自身^のの行為を演技として遂行する舞台上の役者に準えている。
- (6) 日本語での表記も「アクターネットワーク」とすべきだが、その場合ハイフンと長音記号が連続して判読性に欠くため、本稿ではハイフンを省略している。
- (7) 伊藤嘉高も「アクターネットワークは、アクターをつなぐネットワークなのではなく、アクターがネットワークなのである」と述べている (Latour 2005=2019: 524, 訳者あとがき、傍点引用者)。
- (8) ラトゥールが「テレストリアル」(Terrestrial)の語で、「地球／惑星」を人間と同等のアクターに認定していることは、まさにこうした理解の妥当性を示している (Latour 2018=2019)。また〈アクター＝世界〉という関係性を見出すところに、人間存在をネットワークやコミュニケーションのノードに位置づける他の諸説とは異なるANTの独自性が存している。
- (9) ハーマンは、自身が「エジプトで教えている学者」から「アイオワの大工」に転職する場合の例からも同様の指摘をしている (Harman 2009: 130)。
- (10) ANTに関する議論において「プラズマ」に論及しているものとして近年では中倉 (2023) などが挙げられるが、それを主眼的に取り上げている論考が多いとは言えない。しかし、われわれはプラズマをANTの最重要概念に位置づけたい。後述するように、そこにはアクターネットワークの運動を展開させる動因を見出せるからである。
- (11) たとえば文化人類学者の原田龍平は、プラズマに潜む「何か」を「人間にとって無関心で無意味な、特に何とも関係づけられない、そのような非人間的なもの」と指摘し、その理解に基づいて「怪奇的で不思議なもの」(なかでも「妖怪」)を捉えている (原田 2023: 87)。
- (12) したがって「パストゥール以前に乳酸発酵素は存在しなかった」という主旨の言明をラトゥールがする際、それは字面通りの意味ではない。むしろ「パストゥール以前には乳酸発酵素としての実在を有するアクターは存在しなかった」と解釈しなければならない。つまり、のちに乳酸発酵素として実在を与えられることとなる「何か」は、ルイ・パストゥールという人物がこの世に生を享ける以前からすでに存在していたの

である。だが、パストゥールの登場までその「何か」がどのようなエージェンシーの契機を発生させているのか、またその行為／作用がいかに翻訳＝転換され、新たな行為／作用を創発しているのかが観察・記述されていなかったため、アクターとしての実在を「事実」として認定されていなかったに過ぎない。しかしその後、パストゥールによって「乳酸発酵素が存在する」という事実が——彼をはじめとする諸アクターの連関が形成された結果——構築されることで、「乳酸発酵素」という名称を持つアクターとして形象化され、その実在が認定されるようになったわけだ。それゆえ、乳酸発酵素と呼ばれる「アクター」はたしかにパストゥール以前には存在してはいないが、「アクタン」としてはかねてより存在していた、と考えるのがラトゥール解釈として正当であろう。

- (13) すでに「アクタン」という語があるにもかかわらず別名称をそこに持ち出すのは、「あくまで行為を引き起こすものが、さまざまなモノに広がることを示し、形象の違いにまどわされることのないように、アクタンの語を採用しているにすぎない」(Latour 2005=2019: 505-6, 訳注40)と指摘されているように、多くの場合ラトゥールがアクターとアクタンを厳密に区別して用いているわけではないためである。
- (14) ちなみに、ハーマンはラトゥールが「プラズマ」概念を提示していることをPeter Endélyiなる人物から教えられたとした上で、それが示しているのは、単なる非社会的領域としての「プラズマそれ自体」(Plasma-in-itself)であり、非関係的で固有の差異を有した存在体ではない、と不満を述べている (Harman 2009: 132-4)。しかし、プラズマがそうした存在体を指示

するものではないにせよ、まったくの虚無を意味するものでもないことは、すでに述べた通りである。またハーマンが謂う「固有の差異」に関しては、後論を参照されたい。

- (15) この点についてわれわれは、九鬼周造が謂う「原始偶然」(Urzufall)との類似を看て取れると考えるが、詳細な検討は他日を俟ちたい。
- (16) 「不確定性」の語は、ラトゥールがANTの方法論的アプローチを説明する際に提示した「五つの不確定性」——とくに行為の未決定性を示した「第二の不確定性」——を踏まえたものである (Latour 2005=2019)。

参考文献

- 足立明 (2001) 「開発の人類学——アクター・ネットワーク論の可能性」, 『社会人類学年報』 27, pp.1-33.
- Akrich, M. & Latour, B. (1992) A Summary of a Convenient Vocabulary for the Semiotics of Human and Nonhuman Assemblies, Bijker, W.E. & Law, J. eds., *Shaping Technology/ Building Society: Studies in Sociotechnical Change*, MIT Press, pp.259-64.
- 原田龍平 (2023) 『〈怪奇的で不思議なもの〉の人類学——妖怪研究の存在論的回転』 青土社.
- Haraway, D. (1985) Manifesto for Cyborgs: Technology, and Socialist Feminism in the 1980s, *Socialist Review*, (89), pp.65-108. = 小谷真理訳 (2001) 「サイボーグ宣言——1980年代の科学とテクノロジー, そして社会主義フェミニズム」 異孝之編『サイボーグ・フェミニズム [増補版]』 水声社.
- (1991) *Simians, Cyborgs and Women: The Reinvent of Nature*, Routledge. = 高橋さきの訳 (2000) 『猿と女とサイボーグ——自然の再発明』 青土社.
- Harman, G. (2009) *Prince of Network: Bruno*

- Latour and Metaphysics*, re. press.
- (2011) *The Quadruple Object*, Zero Books. =岡嶋隆佑監訳 (2017)『四方対象——オブジェクト指向存在論入門』人文書院.
- (2016) *Immaterialism: Objects and Social Theory*, Polity Press. =上野俊哉訳 (2019)『非唯物論——オブジェクトと社会理論』河出書房新社.
- 久保明教 (2019)『ブルーノ・ラトゥールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探求へ』月曜社.
- 九鬼周造 (2012)『偶然性の問題』岩波書店.
- (2016)『人間と実存』岩波書店.
- Latour, B. (1987) *Science in Action: How to Follow Scientists and Engineers through Society*, Harvard University Press. =川崎勝・高田紀代志訳 (1999)『科学が作られているとき——人類学的考察』産業図書.
- (1993) *We Have Never Been Modern*, Harvard University Press. =川村久美子訳 (2008)『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』新評論.
- (1999) *Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies*, Harvard University Press. =川崎勝・平川秀幸訳 (2007)『科学論の实在——パンドラの希望』産業図書.
- (2002) Gabriel Tarde and the End of the Social, Joyce, P. ed., *The Social in Question: New Bearings in History and the Social Sciences*, Routledge, pp.117-32. =村澤真保呂訳 (2011)「〈社会的なもの〉の終焉——アクターネットワーク理論とガブリエル・タルド」,『VOL』5, pp.228-49.
- (2005) *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford University Press. =伊藤嘉高訳 (2019)『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.
- (2018) *Down to Earth: Politics in the New Climatic Regime*, Polity Press. =川村久美子訳 (2019)『地球に降り立つ——新気候体制を生き抜くための政治』新評論.
- 中倉智徳 (2023)「タルドのモナド, ラトゥールのプラズマ——アクター・ネットワークの外部に残るもの」,『現代思想』51(3), pp.160-71.
- Zuboff, S. (2019) *The Age of Surveillance Capitalism: The Fight for a Human Future at the New Frontier of Power*, Public Affairs. =野中香方子訳 (2021)『監視資本主義——人類の未来を賭けた闘い』東洋経済新報社.